

文華苑の歴史

— 中庭の竹 —



文華館の中庭は展示場の中央に位置し、そこにはモウソウチクが植えてあります。竹の中庭のある美術館として、世界的にも有名であります。それは、矢代幸雄初代館長のお考えでありました。その竹は、昭和35年から今日まで、爽やかな緑を湛え、展示場内を気分良くしてくれる大役を果たしています。

実際この場所は、竹にとって迷惑な所で、生育には不適當と言えますでしょう。この様な限られた環境の中で、常に同じ状態に保つことは、大変なことであります。そこには、管理育成してこられた方々のご苦勞が感じられます。

文華館が始まった当時は、植えた竹が何本も枯れました。植え替えが行われて、今日に至っております。施肥・剪定・間引き・灌水・客土・清掃・薬剤散布と、費やされた時間は相当なものです。肥料不足で葉の色が悪かったり、細い筍しか上がらなかつたり、欲しい筍所に上がらなかつたり、良い場所が上がったと思えば生育不良で腐つたり、それは他の樹木とは比べ物にならない程の苦勞がありました。

しかしながら、太い立派な筍が上がり、立派に生長してくれた時の喜びは、何とも口で表現出来ない程であります。また、ヒヨドリやキジバトが竹の中で巣を作り、

巣立ってくれた時は、私たちに生命の喜びと貴さを教えてくれたのであります。

中庭は、育成管理する者やお客様にとっても、自然現象の観察の場になっていると言っても過言ではないでしょう。

今年は例年の手入れ方法を少し変え、筍の上がる時期の落葉清掃を控えることにしました。それが自然で良いのではないかと。葉の落ちていない竹藪などありませんから、どなたが見られても納得されるはずで。かえってそれが、お客様に対して良い結果となったようです。筍が皮を脱ぎ捨てる光景をじっと眺めていたお客様も随分多かったのです。

日々眺めていますと、色々なことが分かってまいります。

筍は水分を放出しながら、親竹に生長します。生長速度は、他の樹木の生長速度に比べれば、考えられない程速いのです。若竹の程が白い蠟で覆われ、皮の取れた節に細かい毛のようなものが残っているのは、病害虫からの保護であると思われる。若竹が堅くなるにつれて、年々に蠟も毛も取れていきます。

また、真っ直ぐな竹は殆ど無く、節の間隔も様々です。

若竹は、翌年、筍の上がる時期、他に親竹が無い場合は別として、葉を落とし新葉と入れ替えるので、

筍の生長には役立ちません。親竹は、筍がある程度生長するまで、葉を落としません。筍の生長に一度かっているのでしょうか。

枝・葉の付き方は、太陽光線を巧みに受けるために互性で、外側・内側の順に付きます。地下茎は、夏、地上部が出来上がってから、生長します。

竹は1年で親竹の大きさに生長し、年を追うごとに、堅くなります。程は太くならず、枝が分岐するだけあります。寿命は、7・8年位です。文華館では、新しく生えた竹に年号を書いているので分りますが、中には13年も生きたものがありました。

まだまだ竹には不思議なことがあります。誰もがご存じの竹取物語で竹が光る話ですが、最近の研究で、竹の中に含まれる物質チロシンが微かに光ることが発見されました。それは、人間の肉眼では見えないようではありますが、素晴らしいことではないでしょうか。チロシンは、竹の生長に必要な物質だそうです。

中庭の竹は、元々コの字形に植えてありましたが、現在は、その面影は残っていません。しかし、最初植え付けてあった時より程が太くなり、見栄えも良くなりました。そうなるまでには、手入れの方法も度々変えて来たのであります。竹は、何十年の周期で、花が

咲き枯れる心配が残っておりますが、皆様方の努力で今日まで息息が維持出来たのだと思っております。

展示場の中に中庭がある。竹が植えてある。それが多くの方々に安らぎと感動を与え続けてきたのであります。この竹が、建物の外にあれば、これ程までの感動、観察も観賞も出来なかつたでありましょう。展示場が数寄屋風の造りであり、中庭の中に竹が植えてあるから良いのであります。ドラマを生み出すということはこのようなことではないでしょうか。

1種類の植物が、限られたほんの僅かな土壌で息しようとするエネルギー、又その植物を利用して様々な生物が集まって来る生命現象が、私たちの目に直に入ってくる。このような情景が、真剣に美術品を鑑賞される方々の緩衝材としての役目を果たしているのではないのでしょうか。中庭を見て腹立ちを感じる人はおられません。同じ顔色をしていない小さな庭であります。私たちに与えるものは多いのです。

中庭の手入れの苦勞が大きければ大きいほど、感動も大きくなると思っております。そんな1人の思いが、これからも時代を超えて引き継がれて行くことを願っております。

(保安員一同)